

甲子園で指揮 見事に8強

野球に懸ける思いを胸に 母校の監督へ

夏の風物詩の1つ、全国高等学校野球選手権大会(夏の甲子園)。今年、県代表として出場した九州学院高等学校(九学)を監督として率いていたのが、平井誠也さんです。

平井さんは、物心ついた時から野球に興味を持ち、広安小で4年生の時に野球部に入部。以降、九州学院中学校、九学、熊本工業大(現・崇城大)と野球を続けています。「大学時代には3回、明治神宮野球大会に出場しました。4年生時には主将を務め、全国の強豪を相手に1勝を上げました」と、少し誇らしげに話してくれました。

大学卒業後は家業を継ごうと考えていた平井さんですが、転機が訪れます。「卒業時期に坂井宏安前監督が野球部監督に就任。卒業後ご縁があり、学校の寮監をやりながらコーチをやらせていただくことになりました」と平井さんは話し、「最初は役割を果たすこ

とに一生懸命でした。寮監をしながら資格を取り、教諭にもなりました」と続けました。

その後、部長※、中学校監督、再度の部長を経て、令和2年秋、監督に就任しました。

勝つことは大事…でも生徒たちの成長が一番

平井さん監督就任後の九学野球部は、県内の各大会に出場しながら徐々に調子を上げ、今年の夏の甲子園熊本予選で優勝。監督就任2年目で見事甲子園出場を果たし、さらにベスト8まで勝ち進みました。「基本を繰り返すことをベースに、応用が利くよう練習を重ねた結果だと思えます」と、平井さんは分析します。連続出場について尋ねると平井さんは、「当然その思いはあります。勝利を目指すのはもちろん大事です。しかし、ベンチに入れなかった子たちも含め、生徒たちの成長が一番大事だと考えています。いろんなことを学んで、次のステージに進んでほしい」と、思いを語ってくれました。

※部長：責任教師

九州学院校歌

一、青巖に歴史の跡残す 託麻が原の一角に
日毎身を練り文を練る 九学健児 奮育の
活ける真清水流れては 絶えずも若き胸にみつ

二、広き世に立ち固に立ち 負へる務めを果さんと
湧くや血潮は桜咲く 大和らぎ

三、神秘に 高

